

優秀賞

「私の未来は、なに色？」

―傍観者でなく、ヒマワリのように―

神奈川県立湘南高等学校1年

大道 希音

夏のある日、その人は、降り注ぐ太陽に負けなくらい眩しい黄色いワンピースを着ていた。

エルニーニョ現象の影響で、冷夏になると予想された今年の夏だが、太陽の光が、容赦なく照りつけるショッピングセンターの駐車場で、私は暑さから解放されたいがため、建物めがけて足早に歩いていた。その時、ある出来事を目にした。入口に一番近い障害者用の駐車スペースには、工事中によく使われている三角のコーンが置いてあった。そこにやってきた一台の車。その車から降りてコーンをどけて車を停めたのは、二十歳くらいの派手な男性。助手席では、似たような格好の女性が化粧をしている。「感じ悪い。」そう思った。さらに、真夏の昼であることに加え、駐車場が混雑していたため、やっと見つけた遠い駐車スペースから、熱いアスファルトの上を歩いてきた私は、健常者でありながら、障害者用のスペースに駐車したこの二人に、怒りさえ感じていた。間もな

く、駐車場の警備員も、その若い男性に近づき、何やら注意をしているようであった。おせっかいな中年女性も「非常識だわ」などと、警備員に加勢している。その押問答に気付いて、足を止めて様子をうかがっている人もいた。ひそひそ話をしている人達は、みな私と同じ気持ちでいることは、あきらかだった。

しかし、助手席から降りてきた女性を見た時、ひそひそ話は、ぴたりと止まった。彼女は、足が不自由だったのだ。小さな歩幅で、ぎこちなく一生懸命に歩いている。暑い日なのに、冷たく、鋭いモノが私の心にささった。泣きだしそうな彼女を支えながら歩く男性、呆然とする警備員と中年女性、そして傍らで見ているだけの私。

「人を見かけで判断してはいけない」と、よく言われる。チャライ男だと偏見を持って見ていたこの男性は、暖かい心や、助け合う気持ちを持っている人なのだ。この二人はきつと、今回だけでなく、今まで沢山の心ない言葉や態度に傷ついてきたことだろう。そして、あれだけ若い男性をなじり、誤解で相手を傷つけておきながら、謝りもせず、その場を逃げないように去っていく大人達。子供は大人の背中を見て育つという。「謝らないのか？」私は、そう聞いてみたかった。でも、私にその勇氣はなかった。

その時、私と同じ傍観者だったはずの黄色いワンピースを

着た女性が、躊躇することなく、二人の側に駆け寄った。その女性は、「気付かなくてごめんね。」「嫌な思いをさせちゃったね。」と、言い、二人は何度も「ありがとう。」と答えていた。

心の中で思うだけで、非力な私にとって、その黄色は眩しかった。非力なのは、今回だけではない。車椅子に乗った人が、細い路地で困っていた時も、「電車に遅れる」と、自分に都合のいい言い訳をして、車椅子の横を黙って通り抜けた。昨日だって、横断歩道を渡りきれなくて、立ち往生しているおばあさんのことを、黙ってみていた。

今まで、私にとっての黄色のイメージは、母だった。いつも黄色のエプロンを着て、黄色の自転車に乗っている母は、穏やかで、ほとんど怒らない。黄色は、私の幸せの象徴であった。でも、その母が、怒ったことがある。私が、友達との会話の中で、障害児を「ガイジ」と呼んだ時のことだ。母に「ガイジって何？」と、聞かれ「障害児のことよ」と、答えると、母は眉間にしわを寄せ「貴方だって、事故や病気で、障害者になるかもしれないのよ。」と、言った。静かな口調だったが、私の心に強く響いて、思い出すたびに、自責の念かられる。

「害」とは、悪い影響をもたらすもの。誰も何も悪いことはしていない。人をいじめたり、からかったりしない。それな

のに私達は、「ガイジ」と呼ぶ。そこに深い意味などない、軽い気持ちで使っているのである。それでも、相手は傷つく。

それは、絶対に使つてはいけない言葉。でも私は、「ガイジと言うのは、やめよう」と、友達に言ったことはない。私は、正しいと思うことが言えない臆病者なのだ。「また何も言えなかった。何もできなかった。」太陽の光が、私の心を見透かしたようで、その日、私の心は、どんよりしていた。

でも、私は思った。あの大きな黄色い花を咲かせる、いきいきとした、強いヒマワリのような、黄色いワンピースを着た女性のように、勇気や優しさをもった人になりたい、明るく、穏やかで、幸せの黄色いエプロンの似合う母のようにになりたい。

私にとって、黄色は、まだ遠く、届かぬ憧れにすぎない。でも、いつか、その色にふさわしい大人になりたい。そのために、傍観者でなく、一步を踏み出す勇気を身に付けていき